

クリスマスメッセージ「小さな優しさに支えられて」

主イエスのご降誕について、聖書が何を語っているのでしょうか。少しダイジェストでたどってみたいと思います。

婚約者マリアが妊娠していることを知るヨセフ。苦しみ悩む中、正しい人であったヨセフは「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心」します。しかし、そんなヨセフに夢で天使が現れて「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」と告げます。ヨセフは葛藤の中でこの「出来事」を受け入れ、天使の告げたとおり、生まれた子に「イエスと名付け」ました。

時の皇帝アウグストゥスによる住民登録が行われ、ヨセフは身重のマリアと共に出身地のベツレヘムに向かいます。マリアは月が満ちて赤ちゃんが生まれそうなのですが、宿の部屋をとることができません。途方に暮れていた夫婦に目を留め、自分の家の家畜小屋を提供してくださった親切な人がいました。その人も決して余裕があったわけではなかったはずです。しかし、困っている人を目の前にして放っておくことが出来ないとの思いからの行動だったのではないのでしょうか。

やがて一家はヘロデ王の暗殺から逃れるために、出産後まもなくエジプトへ亡命しました。生まれたばかりの乳飲み子を抱えての難民生活です。しかし、そこにイスラエルの指導者となるキリストの誕生を恐れたヘロデ王が「ベツレヘムとその周辺一帯にいた2歳以下の男の子を、一人残らず殺させた」という知らせが入ります。我が子のた

めに犠牲になった幼い子どもたちの命の重みを、夫婦は心に刻み込んだことでしょう。イエス・キリストの誕生を語る聖書の記述は、ロマンチックな夢物語ではなく、大変な葛藤を抱えながら生きる家族の姿を描いています。

受胎告知の後、自分自身も心がおかしくなりそうなほど葛藤しながらもマリアを受け入れていったヨセフの小さな優しさ、ベツレヘムで泊まることなく途方にくれていた二人に心を寄せ、自分の家の家畜小屋に泊めてくださった名もなき人の小さな優しさ。波瀾万丈な聖家族の歩みを支えたのは小さな優しさだったのではないかと思います。私たちもそんな「小さな優しさ」に日々支えられて生きているのではないのでしょうか。クリスマスおめでとうございます。（司祭 越山哲也）

*2025年クリスマスイブ礼拝説教より

